全国結核予防婦人会だより

発行●公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会
〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町1-3-12　TEL 03-3292-9288

2023.3
No.137

2022年度
複十字シール図案
デザイン:あさいとおる氏

健康の輪

健康日本21

編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局（結核予防会内）　題字●初代会長　廣瀬勝代

「第53回肺の健康世界会議」「秩父宮妃記念結核予防世界賞」授賞式おことば

It is a great pleasure for me to present the “Princess Chichibu Memorial Tuberculosis Global Award.” I would like to thank The Union for its long-term collaboration with the Japan Anti-Tuberculosis Association.

Dr. Mao Tan Eang, the winner of this year’s award, led the National Tuberculosis Programme of Cambodia, which reduced tuberculosis incidence rates by more than half in 10 years.

One of the keys to this success was a nationwide expansion of DOTS to the primary care levels. In order to achieve this in a short period of time, Dr. Mao Tan Eang established clear policies and created clinical guidelines based on scientific research. He mobilized resources, strengthened partnership with other agencies, and developed human resource. It is notable that he and his colleagues trained staff, who in turn trained local staff, and his motivation and essential skills were thus transmitted to each staff member who worked in health centers in local communities. He also made numerous efforts to empower women through involving and building capacity of female volunteers for community-based DOTS.

Dr. Mao Tan Eang, I sincerely wish for your good health and continued contributions to the fight against tuberculosis and the promotion of the health of the people of Cambodia and of the world.

On behalf of the Japan Anti-Tuberculosis Association and The Union, I would like to present the Princess Chichibu Memorial Tuberculosis Global Award for 2022 to Dr. Mao Tan Eang for your outstanding contributions to preventing tuberculosis and raising care level in your country.

Congratulations!

2022年11月8～11日にオンラインで開催された第53回肺の健康世界会議において、「秩父宮妃記念結核予防世界賞」の授与式が行われました。国際結核・肺疾患予防連合の名誉会員であられる秋篠宮皇嗣妃殿下がおことばを寄せられました。次ページに和訳を掲載しています。

「秩父宮妃記念結核予防世界賞」受賞者紹介

マオ・タン・イエン氏は2001年から約20年間カンボジア国立結核対策センターの所長を務め、ポル・ポト政権以来、荒廃していた同国の結核対策の改善にリーダーシップを発揮しました。DOTSをヘルスセンターレベルまで拡大することにより結核減少に尽力し、その結果2021年にはカンボジアはWHOの結核高負担国リストから除外されました。その間、２度の全国結核有病率調査を実施するなど、根拠に基づく結核対策を実践しました。国際的にはWHOのグローバル戦略･技術諮問委員などを歴任し、カンボジアでの経験を元に世界の結核対策に関する政策立案、ガイドラインの策定に貢献しました。

（ご挨拶概要）
秋篠宮皇嗣妃殿下、結核予防会理事の方々、IUATLDの理事の方々、この度は大変名誉のある賞を頂きましてありがとうございました。受賞にあたっては、私の功績だけでなく、カンボジア国保健省・カンボジアローカルの組織やコミュニティの強力なサポート、結核対策にあたったカンボジア国内外の多くの人々、そして、カンボジア国内外の結核対策を推進しているパートナー、のおかげでもあります。改めてこうした全ての方々に御礼申したいと思います。私はこれからも結核対策を含む公衆衛生対策に全力で臨んでいく所存です。
　ありがとうございました。

「秩父宮妃記念結核予防世界賞」授賞式おことば（和訳）

　この度、秩父宮妃記念結核予防世界賞を贈呈できますことを、大変うれしく思います。また、ユニオンには、公益財団法人結核予防会の活動に長年にわたり協力いただき、感謝いたします。
　本年の受賞者であるマオ・タン・イエン医師は、カンボジアの国家結核プログラムを牽引し、10年間で結核罹患率を半分以下に削減されました。
　その成功の重要な要因の一つとして、DOTSを全国の医療現場に拡大したことが挙げられます。これを短期間で達成するために、マオ・タン・イエン医師は、明確な政策を確立し、科学的調査・研究に基づくガイドラインを策定され、必要な予算の調達、他の組織との協力強化、人材育成に努められました。医師とその同僚の方々によって研修を受けた人々が、各地のスタッフの研修に携わることによって、医師の志と必要な技能が地域のヘルスセンターで働く一人一人のスタッフに伝えられたことは、特筆に値します。マオ･タン･イエン医師はまた、地域のDOTSを実施するための女性ボランティアの参加を促し育成して、女性たちの力を高めることに尽力されました。
　マオ・タン・イエン医師、どうぞお元気で、これからも結核対策を進め、カンボジアと世界の人々の健康増進に貢献してくださいますよう願っております。
　結核予防会とユニオンを代表して、カンボジアの結核予防と治療水準向上に大きく貢献されたマオ・タン・イエン医師に2022年秩父宮妃記念結核予防世界賞を贈呈いたします。
　おめでとうございます。

注：DOTS (Directly Observed Treatment Short Course)とは、患者が薬を確実に飲むよう確認するなど、結核を確実に治療し薬剤耐性菌ができないようにする方策。

THE 2022 CHRISTMAS SEALS CONTEST

「第53回肺の健康世界会議」で展示された世界のクリスマスシール（複十字シール）コンテストでは、日本が第２位となりました。
https://theunion.org/about-us/awards-and-honours/christmas-seals-exhibit-and-contest

資金寄附者感謝状贈呈式

令和４年11月18日リーガロイヤルホテル東京（東京都新宿区）において、結核予防事業資金として結核予防会に多額のご寄附をいただいた個人や団体の方々に、秋篠宮皇嗣妃殿下より感謝状が授与されました。

また、式典に続いて、記念撮影が行われ、寄附者の方々となごやかなひとときを過ごされました。

カンボジア結核予防会（CATA）からのメッセージ

令和４年12月に予定していたカンボジア結核対策スタディツアーは、中止となりましたが、カンボジア結核予防会（CATA）への寄附は当初予定どおり、11月16日に結核予防会国際部スタッフの手で、お渡しすることができました（写真１）。お礼状（写真２）も届き、貧しい環境にある人々や職場における結核対策のために活用するという強い決意と、来年のスタディツアー再開を心待ちにしているとメッセージが記されていました。

写真１　目録を受け取るモンキー所長代理（右）

Cambodia Anti-Tuberculosis Association

Phnom Penh, November 18th, 2022

To Ms. Sachiko Kiyoshiba
Chairman
The National Women's Anti-TB organization Council
Public Interest Incorporated Association

Dear Chairman, it is of our greeting to your donation for this year . this year of global economic recession due to global crisis. Your consecutive contribution would remind us to your high consideration, your commitment and also your consistent thought to CATA, a young counterpart committed to serve Cambodian people.

We use this budget as part of CATA in kind, to share with JATA Grant to conduct the project activities.

As we have known, CATA with support from JATA is a single organization in Cambodia addressing TB in workplace, the congregated and poor environmental settings.

We would appreciate your contribution to serve those vulnerable group, to keep them healthy contributing to the poverty reduction.

We are looking forward to meet you again during your next study tour .

Again, we would express our profound gratitude to your persistent contribution to fight TB in Cambodia.

Dr. SIDNA HY
Acting Executive Director
Cambodia Anti-Tuberculosis Association (CATA)

写真２　お礼状

季節のお便り　「花梨物語Ⅱ」

結核予防会総裁　秋篠宮紀子

一年ぶりに、身近な自然についての話題をお伝えいたします。

花梨の実と葉

昨年の秋、手作りの花梨の蜜を送っている友人から、「今年の花梨はどうですか」とのお便りが届きました。友人に「花梨が豊作で、木々が黄色の実に彩られています。今年も花梨の蜜を作ろうと思います」とお返事をしました。

花梨の葉が色づいていく頃に、赤坂御用地内にある樹齢90年にもなるこの花梨の木に会いに来ませんかと、友人たちを誘いました。草花を愛でる人が集い、その中には、白杖（白いつえ）を使って歩く人や、手話を母語としている人もいました。友人たちと香りのよい「花梨」の実を手話でどのように表現するかを考えました。また、花梨の葉もよい香りがして葉の裏と表でさわり心地が異なることを学びました。そうした私たちを、大きく枝を広げた花梨の木があたたかく包みこんでくれました。耳を澄まして鳥のさえずりや虫の声、風の音を聞き、秋の光を感じつつ花梨の幹にそっとふれ、友人たちと交わす言葉によって、花梨の木と対話をしているようでした。

花梨の熟した実と葉

「花梨の密」から「花梨ジンジャードリンク」

友人や知人が花梨の蜜を楽しみにしているという言葉を聞くたびにうれしくなり、休みの日に花梨の蜜作りに励みました。花梨の固い実を切るときには、けがをしないよう手元に集中していますが、毎年切っているうちに慣れてきたからでしょうか、花梨の実を切った断面が、切り方によって模様が変わる、そのデザインを楽しむ余裕がでてきました。

花梨の実の断面

ある日、友人が花梨は生姜と相性がいいと思うと話してくれたことがきっかけで、花梨と生姜を使ったシロップ作りを試みました。長男が野菜を育てている畑では、生姜も作っていたので、ちょっと分けてもらえるか尋ねてみたところ、いいよと快い返事をもらったので早速に畑に行き、スコップを入れて生姜を掘り起こしました。そうして、収穫した新鮮な生姜と花梨を薄切りにし、お砂糖と蜂蜜を瓶に加えていきました。

収穫した畑の生姜

数週間後、ひんやりとした風が吹くようになった頃に開封してみました。お湯飲みにシロップ、そしてお湯を入れてかき混ぜると、生姜のさわやかなピリッとした風味の「花梨ジンジャードリンク」が出来上がりました。

偶然できた「ホット花梨」

「花梨の蜜」を作っているときに、蜜のように固まらず、色もうすくなってしまって上手くいかないことがありました。どうしましょうと考え込みながら繰り返し作っているうちに、程よい固さになりました。その過程で、花梨の種に含まれるペクチンが固まるために大事だということ、煮詰める時間や温度、使うお鍋によって、蜜の出来上がりが変化することがわかりました。

よい具合にできた「花梨の蜜」は、楽しみに待ってくれていた友人たちや、興味をもってくださった方に贈りました。一方、よい具合には固まらなかった蜜を、思いつきでお湯で溶いてみたところ、蜜とは違った楽しみ方ができました。この偶然に誕生した飲みものをふるまうと、友人が「ホット花梨」という名前をつけてくれました。寒い時期に「体も心も温まる」とうれしい言葉をもらいました。

飴色に輝く「ホット花梨」

花梨、quince、dulce de membrillo

春待月にオランダの知人と「花梨の蜜」や「ホット花梨」の話をし、花梨の実を見せたところ、「quince（クインス）ですか？」と聞かれました。そしてスペインでは、quinceを使ったお菓子があることを教えてくださいました。

辞書などで調べてみると、英語のquinceは、日本の花梨のほかに、欧米などで栽培されているマルメロのことも指す言葉でした。また、花梨の実とマルメロの実は外見が似ていますが、植物種としては異なることや、花梨の実が固く、皮をむくのが大変なのに比べて、マルメロの実は皮をむいたり切ったりしやすいということも、分かってきました。

スペインのサラマンカ市に住む友人に連絡をとりましたら、友人宅の庭には、スペイン語でmembrillo（メンブリージョ）と呼ぶマルメロの木が２本あり、その実を使ってドゥルセ・デ・メンブリージョ（dulce de membrillo）を作っているとのことでした。花梨と異なり、この実は綿毛におおわれているのでブラシで落としてから包丁で皮付きのまま半分、さらに二等分で四分の一に切って砂糖と煮込むそうです。ペクチンの量が多いのか、ほかの果実より固まりやすく、スペインではジャムのように瓶に詰めるのではなく、羊羹のように容器に入れて固め、少しずつ切っていただくとのことでした。

友人は、冷凍庫に入れて保存し、使うときに解凍しているそうです。朝食にジャム代わりにパンの上にのせたり、デザートやおやつにそのまま、あるいはフレッシュチーズと一緒に食べたりするようです。一般によく食べられるフレッシュチーズは牛乳のチーズですが、もっと味の濃いヤギのミルクのチーズとの合わせ方もあると教えてくださいました。

こうして友人を通してスペインの食文化にふれることができ、うれしく思いました。

友人の「ドゥルセ・デ・メンブリージョ」dulce de membrillo

二つの花梨の実

皇居内にある宮内庁の庭園課を訪れたとき、御用地の花梨の実よりも一回り小さい、かわいらしい花梨の実を二つ受け取りました。丸く手になじむコロコロとした形で、香りもよく、どこの木の実なのかしらと思っていましたら、盆栽の木に成った実だということでした。

盆栽に実った花梨の実

見上げるほど大きな花梨の木に親しんでいたので、花梨が盆栽に仕立てられ、盆栽の花梨にも実が成ることを知り心がはずみました。

今年も御用地内の花梨の木の様子を見に行き、また機会があれば、小さい花梨の盆栽にも会いに行けたらと思っております。

令和４年度地区別結核予防幹部研修会（３地区）開催地よりご報告

関東甲信越地区

結核予防婦人会長野県連合会
会長　中條　智子

2022年11月21日（月）、会場長野市のTHE SAIHOKUKAN HOTELにおいて、関東甲信越地区結核予防婦人団体幹部講習会が開催されました。目的は、結核予防に関する知識の向上と各県婦人団体相互の情報交換を図り、結核のない明るい住みよい社会づくりに寄与しようとするものです。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期となっており、規模を縮小して県内外から41名の参加で開催することができ、ほっとしています。「健康の歌」の斉唱ではじまり、講演Ⅰ「わたくしたちの国際協力と婦人会活動　身近にできる国際協力と複十字シール運動」と題して、結核予防会国際部付部長　小野崎郁史先生より、写真を見ながら日本と関わりの強いアジアの国々の結核の現状や、最近の進歩や課題について、また複十字シール益金の約１/３が国際協力であり、世界、アジアの結核をなくさなければ日本の結核はなくならないとお聞きしました。講演Ⅱ「結核予防活動と婦人会」と題して、全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局　辻知子氏より、結核予防は婦人の手でとワンユニフォーム募金についてお聞きしました。講演Ⅲ「子供の結核ゼロから結核終息へ―BCG接種―」と題して、結核予防会結核研究所名誉所長　森亨先生より、子供の結核は感染するとすぐに発病しやすいとのお話をお聞きしました。日本はやっと結核低蔓延国に入りましたが、蔓延度は欧米の数倍とのことです。

短い時間ではありましたが、結核を知らない会員にも好評で、有意義な講習会となりました。

大きな会場で十分な間隔を空けて開催

中四国地区

高知県健康づくり婦人会連合会
会長　熊田　敬子

令和４年11月14日～15日、第20回中国・四国地区結核予防婦人団体幹部研修会が、９県から236名参加して高知市で開催されました。

１日目は、結核研究所名誉所長の森亨先生から「子供の結核ゼロから結核終息へ―BCG接種―」の講演。続いて結核予防会国際部付部長の小野崎郁史先生からは「わたくしたちの国際協力と婦人会活動　身近にできる国際協力と複十字シール運動」について。そして結核予防会事業部長の小林典子先生からは「結核予防会と複十字シール運動」と題した講演があり、BCG接種の必要性や海外の結核の現状、複十字シール募金が国際協力に役立っていることなど、複十字シール運動について分かりやすく説明して下さり、参加者からは大変勉強になったと感想をいただきました。

２日目は、高知県の取り組みの紹介がありました。高知県健康政策部医監の川内敦文氏から「高知県における結核の現状」「新型コロナウイルス感染症について」、高知市保健所長の豊田誠氏からは「高知の結核集団感染対応～保健師さんへの17年目の手紙～」の講演を目頭が熱くなりながらお聞きしました。

コロナ禍での開催でしたが、高知県出身の歌舞伎俳優市川翔之亮様にも講演と演舞で華を添えていただくなど、充実した内容で今後の活動に役立つ有意義な研修会となりました。

冒頭挨拶の熊田会長

森先生のBCGの講演

九州地区

大分県結核予防婦人会
会長　安部志津子

11月25日（金）にホテル＆リゾーツ別府湾（大分県速見郡）において、九州地区結核予防婦人団体幹部講習会が開催されました。コロナ禍でも、対面開催を実現したいと、全国女性団体連絡協議会の九州地区の大会との合同開催となりました。その結果、九州各地から430名が参加しました。

最初に、「結核予防活動と婦人会」と題して、全国結核予防婦人団体連絡協議会理事・事務局長の山下武子氏より複十字シール運動についての講演がありました。

普段意識していない複十字シール運動・募金の趣旨や、結核について、婦人会の活動がどのようにかかわっているかを、参加者が実感できるように説明していただいて、会員の皆さんも複十字シール運動の理解がさらに深まり、これからの募金活動にも一層の励みとなりました。

続いて、「新型コロナウイルス感染症の動向と結核」と題して、大分県福祉保健部理事の藤内修二氏に講演していただきました。

難しいと思われるコロナウイルスの構造や感染の仕組みを結核との違いを交えながら、お話しいただきました。また県内の感染状況を最新の統計データをもとに解説していただきました。

また、ワクチン接種の重要性にも触れていただき、BCGワクチンと共に感染対策の基本を学ぶことができました。

参加者からもなかなか聞けない話を講師の先生から直接拝聴することができて良かったと満足していただきました。

講演１（山下事務局長）

講演２（大分県藤内理事）

新入会員のご挨拶

（千葉県）東庄女性の会
会長　飯田　和子

あらためて、新会員として加入しました東庄女性の会の飯田です。

私達は、いろいろな事情、コロナ禍の中で、休会状態にありましたが、個々ではそれぞれ複十字シール募金等の活動はしておりました。

世界の中で結核は、アジア・アフリカではまだ高まん延国の状態で見過ごせない状況です。一方、日本においては、医療の進歩により昨年（2022年公表2021年データ）は、中まん延国から低まん延国（罹患率9.2〈人口10万人対〉）の仲間入りをしました。少しずつですが、確実に減少しています。

しかし、最近の新しい感染源として、新型コロナウイルス（COVID-19）が現われ、未知の病原体故に国策としてワクチン接種等により予防活動を進めてきましたが、呼吸器系が侵され、重症化し、死に至ることもある病気で、未だ収束していません。

結核をはじめ、感染症対策の重要性を学び、自分の健康を守る意味でも、正しい知識を得ることが大切だと思います。今後は、公衆衛生や検診等の大切さを学習し、地域に広げる啓発活動をしていく会にしたいと思います。

各地の結核予防啓発活動報告

宮城県から

宮城県地域婦人団体連絡協議会
会長　鈴木　玲子

令和４年９月７日に「第66回宮婦連大会並びに第49回健康を守る中央集会」を仙台国際センター大ホールで開催しました。

この大会は、新型コロナウイルス感染症第６波のピーク時の開催となりました。

政府からの“ウィズコロナ”政策は打ち出されたものの、コロナへの不安は強く、万全を期しての開催となりました。祈る思いで大会を迎えましたが、会員の方々が笑顔で会場を後にされる姿に、主催者として非常に安堵いたしました。

３年にも及ぶコロナの影響は、人と関わることに警戒心を抱かせ、社会的にも閉塞感が漂うような状況でしたが、かつてのように交流しながら、しっかり学んでいかなければとの思いで開催いたしました。

当日は、日本の感染症の第一人者でいらっしゃる尾身茂先生に「新型コロナ　これまでとこれから」と題して講演を頂きました。リモートではありましたが、ステージいっぱいに尾身先生が映し出され、臨場感溢れるご講演でした。コロナ感染症の日本の取り組みやこれからの推移等、数値を元にかみ砕くようにお話し下さり、確かな情報をしっかりと学ぶことができました。会員たちが感動し、真剣に聴講したのは言うまでもありません。

また、午後には全国女性団体連絡協議会の櫻井よう子会長による「婦人会を軸にして、自分も他の人も地域を豊かにするには」という講演を頂きました。婦人会の在り方について、日頃、多くの課題を感じている私たちにはまさにタイムリーであり、大きなご教示を頂きました。

アトラクションは、圧巻の瓶三味線の演奏があり、股旅物日本一に輝いた会員の方の涙を誘う舞踊がありと３年ぶりの大会は意義深い会となることができました。

この大会を機に、会員同士の活発な交流をもとに、地域に婦人会活動で学んだことを還元していきたいと思っております。

山口県から

山口県結核予防婦人会
会長　藤家　幸子

山口県結核予防婦人会では、毎年、県知事表敬訪問で県職員への結核早期発見・早期治療のため、検診車の受診を推進に参ります。

また、県予防保健協会の大事なパネルをお借りし各地域でのキャンペーン活動で募金活動を実施します。

なかなか、大勢が集まることのできる機会も少なくなってきましたが、令和４年11月に県連婦リーダー相互研修会を山口県総合保健会館で開催できました。

この会館には、県予防保健協会の事務所があり、常にお世話していただいていますのでさっそく感染症に関した講座を１コマお願いしました。

冒頭には就任されたばかりの結核予防会理事長尾身茂様には開催のメッセージをいただき（写真１）、「嬉しいことに、日本が結核の中蔓延国から低蔓延国にようやくなれた」ことを、国際部付部長小野崎郁史様からは「海外の結核をなくさなければ日本の結核は無くなりませんよ」とのご講演を、さらに県予防保健協会保健部次長田部一則様は、「募金活動がどのように使われているか」など、中央から・カンボジアから・そして、地元からとしっかり縦軸が整い広い視野でお話が伺え実りある研修会となりました。

さらに、会場ロビーでは複十字運動パネル展（写真２）を開催し、参加の皆様に複十字シール募金をお願いしました。

婦人会活動に一層弾みがつき粛粛と行動に移してまいります。

写真１　理事長尾身様からのメッセージ

写真２　会場で行ったパネル展示

趣味について

埼玉医科大学社会医学
教授　　亀井美登里

はじめに

趣味とは、仕事や職業としてではなく、個人が楽しみとしている事柄をいうのだそうだ。趣味人は、趣味を生活の一部として楽しむ人、また、趣味を生きがいとする人を指すという。

ラッセル幸福論

かの有名なバートランド・ラッセル（1872～1970、イギリスの哲学者）は、有名な著書『幸福論』の中で、幸福になるための方法として「外に関心を向け、好奇心を持つ」こと、つまり「趣味を持ちなさい」と説いている。趣味とは、言い換えれば熱中できる何かであり、それがあると人生がわくわくするもののことである。

「趣味」があることで、苦しんだり、悩んだり、悲しんだりしていても、そこから抜け出し、客観的に自分を見つめ直すことができる、ともラッセルは言っている。

健康寿命

実際に趣味や生きがいを持つことが健康面に対して、良い影響を与えているという研究論文もある。

奈良県に在住している65歳以上の1853人（平均76.4歳）を対象に、趣味や生きがいが、死亡リスクや日常生活にどう影響を与えるか検討された。対象者のうち趣味や生きがいがある1,156人（62.4%）を年齢、性別、BMI等で解析された。その結果、趣味、生きがいがある人に比べて、いずれもない人では死亡リスクが2.08倍、日常生活動作低下リスクが2.74倍、手段的日常生活動作低下リスクが1.89倍、統計学的に有意に多いことが示された。つまり、趣味や生きがいは寿命を延ばすだけではなく、健康寿命まで延ばす可能性があるようだ。

健康日本21（第二次）

国民健康づくり運動である健康日本21（第二次）の10年間の最終評価が昨年2022年にまとめられた。それによれば、目標53項目中28項目（52.8％）が「目標値に達した」と「現時点で目標値に達していないが、改善傾向にある」となった。

最終目標は健康寿命の延伸および健康格差の縮小である。健康寿命（2019）は男性72.68歳、女性75.38歳と着実に延伸している。

わくわくする

趣味は、この先の一生を豊かにしてくれる可能性もある大切なものであることが分かる。どうしたら見つかるだろうか。

キーワードはわくわく感ではないか。子どもの頃を思い出すと良いかもしれない。

趣味に失敗はない。責任やルールもない。気になることには、どんどんチャレンジしてみると良いと思う。

わくわくの先に

素潜りでマグロを獲る「スピアフィッシング　spearfishing」という釣り、いや魚突きがあることを初めて知った。

プロのスピアフィッシャーである小坂薫平さん（1995年秋田県生まれ）は、2021年に189cm、86.1kgのイソマグロ（「磯のダンプカー」と呼ばれ、ものすごいスピードで海の中を泳いでいる）を素潜りで突くという世界記録保持者である。

あるとき出会ったマグロへの強烈な憧れから魚突きへの道は始まった。そして、それはやがて趣味を超えて生活となった。

さいごに

車いすテニスのレジェンド・国枝慎吾さんが2023年１月に現役引退を発表された。車いす競技に打ち込む自分の姿を通して、障害者が行うパラスポーツという枠組みを越え、誰もが親しむスポーツとして人々を熱狂させたかったと明かされた。

ほかの人々にワクワク感を伝えることこそ自らの使命と感じられていたということか、さすが達人だからこそのお言葉と感じ入った。日常生活にわくわく感を持ち続け、自らの心を潤せば、ラッセルのいう「幸せ」な人生といえよう。わくわくする何かとの出会いに気づけるならば、きっと。

ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。

ちふれが、約束すること。

●高品質・適正価格であること。
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。

●無香料・無着色であること。
肌にやさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。

●全成分・分量・配合目的を公開すること。
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。

●製造年月をすべての容器に表示すること。
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。

製造記号の読み方　2017年 4月 1回目

●環境問題に配慮すること。
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。
ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。

ちふれ

現地ボランティア（中央女性）を応援しようとユニフォームを贈ることになりました

ワンコイン・ワンユニフォーム募金のお願い

あと2年（残り600枚）を継続予定
皆さまのご協力をお願いいたします

※現地のボランティアさんはこのユニフォームを着て、コロナ禍でも活動を続けています